

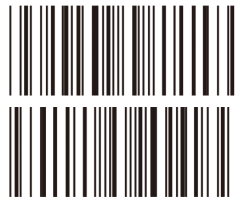


# WRECKED TWO

Mermaid  
Swamp  
Side Story

Uri

Uri



This is a spin-off story of pixel horror game "Mermaid Swamp" written by Uri, and contains a romance between Rin and Seitaro.

WRECKED TWO

URI GAMES

夏季休暇が終わり新学期の始まった秋口に、凛・清太郎・由香・雄太の四人はいつもと変わらない大学生活を送っていた。ある日、清太郎の凛に対する態度がおかしいことに気づいた由香と雄太は、直接彼に話を聞くことにする。それをきっかけに、凛と清太郎のこれまでの関係は瓦解していく――。  
「人魚沼」登場人物の恋愛関係を描いた番外編。



08 ガード下の  
07 トンカツ  
06 定食屋の夜  
05 変調  
04 飲み会  
03 發  
02 飼育員  
01 食堂にて

111 93 79 59 45 32 11 3

16 あとがき  
15 融解  
14 はじめて  
13 再び  
12 それだけでも  
11 檻  
10 攻防  
09 もういい  
08 懊悩

295 285 263 245 222 199 183 155 128

本書の本文・カットイラストは  
転売・無断転載を禁じております。

本書は作者サイト・PIXIV掲載の本文に  
加筆修正を行っています。

## 一・食堂にて

「なんかさー、最近凛と清太郎、変じゃね？」

コップの水を一口含んでから、息を吐き出すのに乗じてそう続けた雄太の思惑を図り損ね、由香は少しの間逡巡した。何か言葉にしようと口を開いたものの何も出てこず、彼女はただ眉根を寄せて軽く首を傾げるだけに留まった。

月曜日の二限目に同じ講義をとっている由香と雄太は、授業を終えると学食へ向かい、昼食を一緒にとることを習慣にしていた。時間は十時五十分と昼食にはかなり早い時間なのだが、十二時が近くなれば学食がかなり賑わい、席の確保が難しくなるためだった。二人はたつぷり時間をかけて昼食を平らげ、午後の講義が始まるまでそこでだべるのを常としている。まさにこの時も二人は他愛もない会話を楽しんでいたのだが、雄太がふと思いついたように発したその言葉は、彼らの間の空気を少し変えた——と言っても、そう感じたのは由香だけかも知れないが。昼食時の学食の喧騒に埋もれていたはずの、言ってしまうほどでもないような会話が、僅かな緊張を以って輪郭づいたように彼女には感じられた。

「別にあいつら元々仲良かった訳じゃないじゃん？ でもさ、口喧嘩ばつかとは言え顔合わせればすげえ話してたよな。なんつうか、あいつらの打てば響くみたいなやりとり見てるの好きだったんだけどさ、最近そういうのなくね？」

「……凜と清太郎が変なんじゃなくて、清太郎が変なんだよ」

何と返そうか迷った挙句<sup>あげく</sup>ぼつりと零<sup>こぼ</sup>された由香の言葉を受けて、やつぱそう思う？ と雄太がにやりと笑った。由香はそんな彼を冷ややかに眺め、温<sup>ぬる</sup>くなったほうじ茶を啜<sup>すす</sup>った。わざとぼけた質問をしないで最初からそう切り出せばいいのに、と内心で舌を鳴らす。彼女は雄太のおちやらけた性格を嫌っている訳ではなく、むしろ彼の長所の一つであると普段は好ましく思っているのだが、それでも彼女が真剣にならざるを得ない内容の会話において、ふざけた調子で回りくどい話し方をされると、軽い苛<sup>いらだ</sup>立ちを覚えるのだった。そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、雄太は指先で摘<sup>つま</sup>んだコップを左右に揺らしながら言葉を次いだ。「明らかにさー、清太郎の奴、凜に話しかけなくなつたよな。前は逐一<sup>ちくいち</sup>叱<sup>ち</sup>つたり馬鹿にしたりしてたのにさ。凜のアホさ加減に呆<sup>ぼ</sup>れて何も言わなくなつたのかとも思つたけど、めっちゃくちや嫌<sup>きら</sup>そうな顔してたり何か言いそうになつてたりはするから、そういう訳じゃないんだよな。本当単純に、話しかけないようにしてらるって感じでさ」

「そうだね。あと……何か最近、機嫌が悪そうに見えるかな。凜がいる時は特に」

そう！ と雄太が膝を打って由香に人差し指を向けた。この動きは落語研究会所属の雄太らしい彼の癖の一つだ。もし手に扇子<sup>せんす</sup>を持っていたとしたら、由香に向けられていたのはそれだっただろう。由香は苦笑いを浮かべつつ、彼の指先を手のひらでそつと覆<sup>おお</sup>い右にずらした。どんな親しい相手でも、指を指されるのはあまりいい気分のものではない。雄太もそのことに気づいたのか、慌<sup>あわ</sup>てて手を引つ込めごめん<sup>ごめん</sup>と謝<sup>ま</sup>つた。

「かと言って凜は全然普段と変わらないじゃん？ ひよつとしたら凜が清太郎に何かしちやつて、あいつ馬鹿だからそれを忘れて普通にしてんのかとも思ったんだけど、そうだとしたら清太郎のことだから凜に説教かますと思うんだよね。でも、ただ不機嫌そうっただけだからさ、何か気になっちゃってー」

要するに「清太郎が変」ということが言いたいのだと、由香は雄太の話しぶりを回りくどく感じていた。彼の話した内容は少し前から由香が考えていたこととほぼ一致していて、だからこそ清太郎が変なのだ最初彼に告げたのだったが、どうやら雄太は逐一説明しなればとも思いついでいるらしい。よく考えた後の結論だけを口にするよう日頃から心がけている由香にとって雄太のそういう話し方は冗長じょうちやうに感じられるのだが、落語をやっている彼は情況説明が癖になっているのかも知れないと、何も指摘せずにいた。そんな瓊末さつまつなことをつくより、大事なことを彼に聞きたかつたからである。

「——それで、雄太は何がしたいの？」



由香の言葉を受けて、雄太はニヤリと口の端を上げた。

「今日の夜、清太郎とこ行って聞いてみねえ？ 凜と何かあったのーってさ！」

「……清太郎、バイトあるって言ってたけど」

「知ってる知ってる！ だから、あいつのバイト先行ってちよつと飲むついでにさ。もし店が混んでたら飲むだけでもいいし！」

樂しそうにニコニコしている雄太を、由香は眉をひそめてじっと見つめた。別に清太郎のバイト先——個人経営の居酒屋である——に彼の就業中に遊びに行くこと自体は、時々していることだし問題はないのだが、いまいち雄太の迷惑を図りきれずにいたためである。

「何で私ものなの？ そういう話なら男同士ですればいいじゃない」

「そ・う・い・う・話・っ・て？」

「もう、いちいち茶化ちやかさないでよ」

「ごめんごめん！ だつてさー、凜も関係してることなんだし、由香も話聞いといた方がいいでしょ？ 由香だつて、凜と清太郎がギクシャクしてるの気になつてんじゃないの？」

確かにそうだけだと眩くらくように漏らしてから、由香はほうじ茶を一口含んだ。実際彼女は凜と清太郎の異変に気づいていながら何も聞くことができずに、モヤモヤとした気分でここ最近を過ごしていた。凜に聞いてみようと思つたこともあつたが、よくよく観察してみれば清太郎と違って彼女は平時と変わらず、彼と諍いさかいでもあつたのかなんて質問をわざわざして杞憂きゆうを与えてしまうのは憚はばられたし、そもそも「何が？」という答えしか返つてこなさそう



だったのだ。かと言って清太郎に尋ねても、凛と仲のいい自分に實際を教えてくれるかどうか確信がなかった。だから、清太郎と付き合いが長く、また人から話を聞き出すのがうまい雄太がその質問役をやってくれるというのは、由香にとつては助かることであるはずだった。しかし、彼女が煮え切らず二の足を踏むのには理由があった——清太郎の答えの如何いかんによっては、彼女が関わるべきではない、関わりたくないことに首を突っこむ羽目になるかも知れないからである。軽く俯うつむいて黙りこんでしまった由香を尻目に、嫌なら無理にとは言わないよと、雄太が笑いながら言った。

「ただ、由香も最近二人のこと気にして居心地悪そうだったから誘ってみただけ！ ま、俺は直接聞いちゃった方がすっきりすると思うし、一人でも聞きに行っちゃうけどね！」

——雄太って、本当に人のことよく見てるのね

由香は相変わらずニヤニヤしている雄太の顔をじっと見つめた。「居心地悪そう」な雰囲気など出さないように気をつけていたはずなのに、彼はとっくに気づいていたのだ。雄太の軽薄なノリの裏に隠されたさりげない気遣いに、由香は何となく申し訳ない気持ちになった。

「……ごめん。気遣わせちゃったね」

「んなことねーって！ で、どうする？ 今日一緒に聞きに行っちゃう？」

再びほうじ茶を啜った後、行くよ、とだけ由香は答えた。

「よっしゃ！ 由香今日は授業五限までだよな？ 俺四限までだから、食堂で待ってるよ。じゃ、俺そろそろ教室行くわ！」

また後でな、と言ひ残して、雄太は食事のトレーを持って颯爽と去って行つた。彼が昼食後の三限にとつて講義は食堂からかなり離れた棟で行われるため、早めに教室に入つておかないといひ席がとれないのだ。だからいつも由香は、雄太がいなくなつてから午後の授業のために教室へ移動するまでの少しの時間を、一人でぼーつとすることに費やしている。この時も同じように彼女はぼんやりと考えごとをしていたのだが、周囲を行き交う学生たちの内の何人かには、伏目がちにテーブルを見つめる楚々とした彼女のどこか物憂げな様子に、ちらと視線を走らせる男もいた。

——別に、清太郎に話を聞くのが嫌なんじゃない

ただそこに何があるのかを直視して、現状が変わつていってしまうかも知れないという肌  
のひりつきを感じるのが嫌なのだ。そう考へて、由香はふうとため息をついた。無知は幸福  
という言葉があるらしい。どんな文脈で誰が発したのか彼女には分からないが、今彼女が  
身を浸しているのはまさに知らない方がいいこと、知るべきでないことを知らないでいら  
るが故の幸せなのだろう。親元を離れた遠い都会で、好きな勉強をしながら初めての一人暮  
らしを謳歌しつづつ、の置けない仲間たちと過ごす穏やかな日々は、いつの間にか彼女の中に  
環境の変化を厭う気持ちを植えつけていたらしい。上京したての頃はそうじゃなかったの  
など、由香は人知れず自嘲の笑みを浮かべた。

ふと食堂を囲う大きな窓に視線をやると、その向こうにはどんよりとした曇天どんてんが鎮座ちんざしていた。目を凝こらせば、窓ガラスには僅かではあるが水滴がぴたぴたと貼りついている。気がつかないうちに、雨が降りだしていたようだ。そういえば、後の授業を控えて大分人が減った学食の喧騒の奥に、さあさあという微かな雨音が聞き取れる。

——強くないといいけど

現在は別棟へと移動するために中庭辺りを歩いているだろう雄太のことを想いながら、また彼の言った「そういう話って？」の言葉を苦々しく振り返りながら、由香は冷えきったほうじ茶を飲み干した。